

研究報告

長野というパラリンピック経験 伊原義文氏に聞く

富田 幸 祐 (オリンピックスポーツ文化研究所)
齋藤 雅 英 (スポーツ文化学部)

【生年月日】

1947年3月12日

【職歴】

- 1965年4月 長野県職員採用 (駒ヶ根病院・総務部職員課・土木部管理課・生活環境部県民生活課・東信事務所・総務部情報統計課・社会部労政課)
- 1987年10月 下伊那地方事務所出納係長
- 1989年11月 社会部障害福祉課福祉係長 (在宅福祉・パラリンピック担当)
- 1992年4月 パラリンピック担当専任 (課長補佐)
- 1994年4月 長野パラリンピック組織委員会 (NAPOC) 事務局次長
- 1999年4月 飯田建設事務所次長
- 2001年4月 下伊那地方事務所副所長
- 2003年4月 飯田児童相談所長
- 2004年5月 参事兼飯田教育事務所長
- 2007年3月 長野県職員退職
- 2007年3月 南信労政事務所飯田駐在・南信教育事務所飯田事務所特別嘱託 (2011年3月まで)

キーワード：長野パラリンピック, 長野パラリンピック組織委員会 (NAPOC), 障がい者スポーツ

はじめに

本稿は長野パラリンピック事務局次長を務めた伊原義文氏に対するインタビューを基にしている。インタビューは2019年8月23日に長野県飯田市の伊原氏の自宅にて行った。

当初インタビューは13時から始めておおよそ2時間を想定していた。しかし伊原氏から語られる長野パラリンピックの様相にインタビューアーらは夢中に耳を傾け続け、気づいた時には18時を過ぎていた。結果的に5時間近いロングインタビューとなったのである。後に文字起こしをした

インタビュー原稿は7万字にも及ぶ。

本稿はそのインタビューの一部に語句等、本旨に変更を生じさせない範囲での修正、再構成を行ったものである。脱稿後、伊原氏に原稿の確認をしてもらい了解を得た。なおインタビューの実施に関しては、日本体育大学倫理審査委員会の承認を得ている (承認番号：019 - H082)。

1. 飯田から長野パラへ

富田 伊原さんが長野パラリンピックに関わるようになったきっかけを教えてください。

伊原 私は長野県の職員なんですよ。もともと県庁にいたんですけど、長男が小学校6年になるときに、飯田にいったん帰ろうかなと思って、それで帰って、その後2年いて、できれば、もうみんな飯田に居たいって話をしてたんですけど、当時の仲間の人だったり上司やなんか飯田に来た時とかに県庁に戻れと言われて、それで初めに異動の話があったのは、残業の比較のない総務部関係で、定年まで飯田にずっといるっていうわけにはいかんだろうっていわれて、残業のないところでどうだっていわれたんですけど、それで秋に異動の予定だったんですよ。ちょうど、飯田に戻って2年になるからってことだったんですけど、総務部への内示っていうことだったので、それならいいかなって思ってた、当時の社会部長が人事異動予定者名簿を見て、私を社会部にしろと、当時、オリンピックもやるし、パラリンピックもって話がちらほら出てる時期で、伊原に任せればいいじゃないかって言って、そこで総務部から社会部にひっくり返っちゃったんですよ。当時の人事係長に文句言ったときにね、俺たちは意向はちゃんと伝えたけど、どうしてもって言われたとかでね、その社会部長はたまたま前の職場で一緒だったので、それで社会部障害福祉課に呼んでくれたんだと思うんだけどね、それで結果的にそこにいったんですけどね、以前県庁にいた時に組合とかの陳情とか担当してたんですけど障害福祉課ってのは、いろいろ担当することが広がったんです。障がい者のスポーツ大会だとか、在宅福祉のこととかね、そんなところだから、いつも残業やっててね、この課だけはやだなと思ってたところだったんですよ。結果的に、そこ行っちゃって、それが最初なんですよ。そこへはまっちゃったっていうのがね。

富田 異動されたのは、長野オリンピック・パラリンピック開催が決まる前のことですか？

伊原 長野オリンピック・パラリンピックが決ま

る前だったんですよ。1989年（平成元年）年の秋に県庁行って、そのときの冬かな、IOCの招致かなんか、IOCっていうかプレスかなんかの総会だかが東京であって、オリンピックに関するね、そのときに長野県知事が言ったんですけど、パラリンピックはどうなんだっていう質問が記者から出て、オリンピックが決まればパラリンピックもやりますよっていう話で、だからオリンピック招致と同時にパラリンピックもやらなくちゃいけないって話で、一応出だした頃だったんですよ。それで長野としては、オリンピックはどうしてもやりたいっていうのがあったから、そうなればパラリンピックもやる、じゃあどこにやらせるって話があったね。そうしたら、障がい者スポーツとか在宅とかやってるんで俺が行った課っていうかね、そこでって話が出ていて、それでそのうちにそういう話が公式に報道から質問されたりして、それが記事になり順々に話が進んでいって、それから1、2年して長野が正式に決まったって感じなんですよ。それから入って行って終わった後は残務整理1年やったので、9年半、結局それに関わっちゃったってことなんですけどね。

富田 つまり長野パラリンピックが決まる前から最後まで関わっていたということ・・・

伊原 そういうことなんですよ。当時は俺一人って話で、課でスポーツ担当っていうのはいたけど、それは従来のことを毎日残業までしてやってたから、そうするとその担当のところから来ないから、パラリンピックの話がくればしょうがない、俺のところでは原稿つくったり、資料作ったりみたいなことを少しやったりしてて、そこからはまっちゃったって感じなんですけどね。

2. モデル無き団体設立

富田 そうなると組織委員会の設立準備も伊原さ

んを中心にやられていたということですか。

よね。

伊原 そうですね。そのとき、窓口がなかったの
で、結果的に俺のところやらざるを得なくて。

富田 今の話でもおっしゃってましたが、運営
のモデルをここにしているようなこともなかつ
たということですか。

富田 委員選定や組織体制はどのようにして。

伊原 基本的には組織委員会の会長は知事がや
る。それはオリンピックの流れもあってね。それ
と開催都市は長野市だから、オリンピックと同じ
ように長野市市長と。あと関係の市町村からとか、
そういうのはそういう理由でやってたけど誰も経
験がなかったの、極端なことといえば俺たちが数
人でこんなもんかかって作ったような組織だつ
ただけど、誰も駄目だっていう人もいないから、
そんな感じかっていうくらいの話だったから、そ
ういう意味で人選ってというのはそんなに悩むつ
ていうことじゃなくて。よその大会はこうだとかも
あんまりね。海外のことだし、参考にならんし、
こんな事例なかったし。一番は亡くなっちゃった
人だけど初山さん。国立リハビリテーションセン
ターの総長で国際パラリンピック委員会（IPC）
の東アジアの代表委員だったんですよ。それと
井手さん。厚生省の課長なんかやって。日本身
体障がい者スポーツ協会の常務理事で、1964年
の東京パラリンピックをやられた人です。その人
たちに挨拶行ったら協力しますよって言ってくれ
て、かなり協力してくれたんです。そのおかげも
あって、任意団体の組織委員会をこんなメンバ
ーで作りました。これは初山総長と井手さんにも了
解を取ってありますっていえば、知事たちもそう
かっていうくらいの話で。だから人選について、
ここの人を入れていいのか、入れなくていいのか
で悩んだとか、よそから圧力かかってきて悩んだ
とか、そういう記憶はあまりないんですよ。ほ
とんど作ったものそのまま、一応そういうこ
とも初山さんに聞いてみると、そんなものでしょ
うねってくらいの話だったから。組織づくりつ
てのは、そういう感じでできていったと思うん

伊原 モデルにするものがなかったんですよ。井
手さんたちがやってた東京パラリンピックは、
ほとんど厚生省の主体だったし、しかも東京でし
たから。井手さんが当時のパラリンピック室長
だったと思うんですよ。年齢的には30代だつた
って言ってましたね。東京のときは厚生省が主体で、
障がい者スポーツ協会みたいなところを使いなが
らやってたそうなんです。こっちだとそういう
意味で使える組織ってというのはなかったんで
ね。俺たちは、オリンピックと同じでいこうと。
規模を小さくするんで、基本的には知事を会長に
して、開催都市が長野市長なんでそれを副会長に
してっていうかね。あとは開催都市の市町村長が
頭に入って。あと、それに初山さんのような人た
ちとか経済界の人とかを組織の中へ入れて準備委
員会をつくらうっていうことで。

富田 具体的な話が動いていくのってというのは、
完全に組織委員会が立ち上がったからのことす
か。

伊原 そう。組織委員会っていうか、任意団体が
できてからだよね。当初は組織自体も県庁の中
にある福祉部門でのレベルだったから、組織がで
きないと公式に外へ向かって話にもいけないし。
例えばスキーならスキー連盟、スケートならスケ
ート連盟とかね。それで専門委員会とかそういう
ものをつくって段階になったら、そういう団体の
頭を入れてくっていうかね。それで、OKを取り
付けといて入れてくっていうか。ただね。なか
な今みたいにね。例えばチェアスキーだつてそ
んなに盛んなわけじゃないし。チェアスキーが乗
れば、極端な話だけドリフトの椅子が傷むんじ

いかだとかね、それとか、スケートなんかはスケート靴のひもを競技役員が締めてやったら、締め方が悪かったから負けちゃったみたいなこといわれて。俺たち、あんまり、そういうものに協力したくないとかね。今でこそ、ある程度のスポーツ意識っていうのはあるけど、当時はリハビリの一環の意識もかなりあったからね。

だから、そういう面では競技団体もちょっと引いちゃうっていうところもあったんですよね。本当に、俺がそういう団体に頼みに行ったりしたときも、会長じゃないけど、専務やってた人たちからも、俺たちは今まで協力はしてきたけど、せっかく協力してきたけど、もうやらねえぞみたいなことを反省会の時に言われたりね、そういうのもあったんで、そういうのどうするか。なかなかそういういわれちゃうと、俺たちも協力しづらいとかって話も結構出たんですけどね。

だから組織ができて協力をもらって専門部会みたいなものを作ってくにしてもね、その間にそれを作るまでに、そういう団体の人たちの了解を取ってくっていうかね。どこが実際に中心でやってもらうとかあったし。あと、何ていうのかな。今度は競技団体の中にもまた議員がその会長やってるとか、市長がやってるとか、それはやっぱりね。党派が違うとか。そういう中で、何となくあいつは面白くねえみたいなのまで。そうはいうけど、全く無視できなくてね。田舎だから余計ね。だから、そういうことも多少ありながら何となくやってたっていう感じですよ。当時は人数もそんなに多くなかったしね。

富田 メインとしてやられてたお仕事っていうのは、そういう交渉だったりとか。

伊原 初めはそういうことばかりでしたね。それこそホッケーっていうと、障がい者のホッケーなんて組織なくてね。ホッケーは、長野県では軽井沢のプリンスホテルの系列でね。そこが窓口だから、プリンスへ頼みに行ったりとか。結構軽井

沢行ったりとか志賀へ行ったりとか。あと、まずは岡谷に行ってスケート連盟に取り付けるとかね。そういうのが最初の仕事でしたよね。

3. オリンピックとの兼ね合い

富田 当時、オリンピック側の組織委員会とかと交渉とかってあったりしたんですか。会場の問題だったりとか。

伊原 オリンピックは県庁の人で、青木さんっていう人が。若い頃に部が一緒だったりしたんで、その人が窓口になったりしてくれて。オリンピック自体もそんなに組織、大きくなかったからね。だから個々でこうしたいんだ、ああしたいんだっていう話は基本的にはそういうところで話をしたりね。中には抵抗がある人いたかも知らんけど、良い悪いは別として、両方とも県の職員が中心組織の中にいたので、ちょっと飛んでってこれいいよねとかね。

その青木さんがアルベールビルの前調査みたいな行くときに、パラリンピックの組織もちょっと寄って聞いてきてよって言ってついでに寄ってもらって。それでパラリンピックではオリンピックの競技施設は100パーセント同じでなくても、なるべく同じ施設を使いたいんだっていう意向でやってるちゅう話を聞いて。それじゃあ必ずしもとはいかないけれども、例えばアルペンの大回転はパラリンピックも同じ会場っていう、そういうことじゃなくても同じ会場を利用すればいいんじゃないかっていう話したりね。東京パラはどうなってたかよく分かんないけど、長野の場合は人数もそんなに多くなかったし、中心の人たちが同じ県の職員同士っていうのもあってね。そういう話もしやすかったでしたね。

ただ同じ長野オリンピック組織委員会(NAOC)に派遣された県の職員でも、俺たちはオリンピックやりに来たんだ。パラリンピックのことは聞いてねえって言うやつもいるんですよ

ね、中にはね、けど、初めの頃は意外と気心知れた人たちが両方とも中心だったから。それは意外とね、ねえ、ねえっていいながらやりましたね。初めからこう決めるんじゃないで、これうまくいかないからこういうふうに変えたいんだけどみたいなこと言うと、しょうがねえなあみたいな話ができたらね。組織が大きくなるとそういう話ができないじゃないですか。初めのうちはそういうのできてたし、もとのところはそれで決めていけたから、意外と良かったのかもしれないですね。

富田 当初は任意で組織づくりをして、その後専門委員会設置してということだと思うのですが、伊原さんのお仕事には変化はあったのでしょうか。

伊原 一応、俺たちは中にいたって感じなんだけど。専門委員会も常になにかやるわけじゃないので、年に1、2回それぞれ委員会をやるだけだから、大体こういう感じでやりたいとか、競技はこういうところで実施したいとかを集まってもらって説明して、いいじゃないのっていうくらい感じだったから。組織といいながらもそんなにね。

富田 基本的には事務をやりつつ、その中で大きな方向性を決めていたと。

伊原 そうですね。ほとんど。それと、オリンピックのほうと調整しながらね。いいじゃないかってくらいの話で順々に進めてったって、そんな感じですよ。

4. スポーツか福祉か

富田 ものを決めていく段階で大きな障壁はあったのでしょうか。

伊原 そうだね。駄目だったってひっくり返され

ちゃうとかそういうことはなかったですよ。俺たちは組織自体も小さかったから。ただ、報道の人たちの中でパラの捉え方が全然違っててね。俺たちがパラはスポーツ大会だって言ったらそうだよねって捉えてくれる報道の人たちもいる一方で、障がい者をさらし者にするみたいなね。それでいいのかっていう人もいたしね。だからいろいろな団体の人とか、報道の人たちとか、そういう人たちとの考え方の違ってたのはうんとあったしね。

俺も東京の何々を考える会みたいなね。大学の先生みたいなものもいたりする団体に呼ばれたりしてね。本当つるし上げみたいなんですよ。会自体が。そんなのにわざわざ行くのかと思いつつ行ったけど。全然、話が膨らんでっちゃうってうかね。今、日本の障がい者の福祉が充実していない中で、そんな大会をやるって。福祉の整備をしないでそんなことやって、あんたら、どういう考えでそんなことやるんだみたいなことまで言われましたからね。

でも俺たちは、そうじゃなくてパラをスポーツとして捉えてその中で、むしろそういうところから、今度は違う切り口から、障がい者っていうのを捉えてもらいたいんだと。障がい者だってそんな弱い人ばかりじゃないしね。皆さんがというような福祉の一環として、いろいろやってくれることを望んでるような人も中にはいるかもしれんけど、そうじゃなくて、自分たちは競技者として認めてもらいたいんだって障がい者が増えてるんだと。むしろ、そういう人を俺たちは増やしたいんだって話をしたりして。でも延々とつるし上げみたいな記憶はありますよね。東京に呼ばれて、どっかの会場へ来いって言われて行くんだけど、何人かのパネラーの中で結局俺一人がほとんどつるし上げみたいな時間で終わって。障がい者スポーツ、福祉、パラリンピックをどういうふう考えてるんだって。

当時はスポーツって捉える人のほうが少なくて。障がい者福祉を考える会みたいな人たちとかはスポーツとして捉えてなかったですよ。介護

の人をどうするんだとかね。だから基本的には介護は必要かも知らんけど、スポーツやるような人は競技者の指導者だとかそういう人たちが兼ねてるんでそんな介護なんていうことを俺たちは考えてないって言ってね。こっちも言われっぱなしだったりすると、ちょっと売り言葉に買い言葉になっちゃったりね。カチッと頭にくるからね。「障がい者スポーツなんで介護者なんてこと考えてないです」って言うと、またワってやられるわけですよ。そんなことで長野のパラリンピック、成功するわけねえじゃねえかみたいなことまで言われましたけどね。

富田 スポーツ大会としてパラリンピックをやるというか、パラリンピックはスポーツ大会なんだというようなモットーが少なくとも伊原さんには、組織委員会を立ち上げる前の段階からお持ちであったと。

伊原 まず俺たちが競技団体へ説得して回ったことは、そこからですよ。俺たちは従来のような福祉の大会をやるわけじゃない。今までも福祉の障がい者スキー大会とか長野県でもやってたけど、それとは違う。だけど、そういうレベルの中から抜き出した記録に挑むとか、体力を、他の人には負けないとか。あくまでも競技者としてやるうってしてるのを集めてるんで。そういう意識のない者に参加してもらおうとは思ってないし。だから、そういう大会だと思って協力してほしいって話は、基本的には説得して回りましたよね。

富田 パラリンピックを巡ってスポーツか福祉かを巡って応酬が行われていたと。

伊原 俺も生意気だったから、あれかもしれないけど、当時はそういうこと言われると言い合いになっちゃうし、もうそんなことで議論してる時間はないって感じだったけどね。だけどそうやってる中でも、基本的にはさっきも話に出た初山さん

とか、井手さんとかは、パラリンピックはスポーツだっていってくれたし。だんだん競技団体の人たちとか報道の人たちも受け入れてくれてね。中には俺、あんたの取材は一切受けないって言って、最後まで口を利かなかった記者の人たちもいるけどね。報道の人たちは、だいぶ温度差があったんですよね。そんなこと、いつまでもやってたら進んでかないしね。大会がこんなのでつぶされちゃっていいのかっていう話までしたんですけどね。

パラリンピックのイメージが今のようなのと全然違うから。まだ福祉の一環っていうのは、どうしても抜け切らないし。担当の記者が俺たちの想いを汲んでくれても、今度はキャップみたいな、そういうところに持ってくとまた記事がね。いやそうはいったってパラはまだ福祉社会面だろみたいなね。ていうのが報道の中にもあって。そういう人たちとも、夜一杯飲みながら、ちきしょうめって言い合ったこともあるけどね。そういう人たちは今でも結構お付き合いしてるから。

記者も全国紙だと数年で異動して変わってくる、そうすると話を聞いてくれたりもしてね。そんなこんなで報道の捉え方も順々に変わってって。そういうのが、一番、大きいのもかもしれないですよ。まあ本音はみんなどう思ったか知らないけど、建前はスポーツやるんだからなって。そうじゃないなら来てもらわなくていいっていうね。最初に赴任してきたときに俺がみんなにそう言ったから。そんな嫌々やらされてるんなら、来てもらわなくたっていいからって。他の人たちも、面白くないかしらんけど。ほんと報道の人たちにも、スポーツ欄で捉えてくれっていうか。だって、本当にスポーツコーナーでパラを書いてくれるようになったのは大会の直前じゃないかな。

齋藤 お話を伺っていると、スポーツをやるんだという考えが、結局一つの筋というか柱になっていたというか・・・

伊原 そうしなけりゃパラやる意味ないと思ってたからね。でもそれが福祉の外圧でぐらぐらするんであれば、そんなパラリンピックやっても意味はないと思ってたし。そうなったら絶対、俺を外してくれって言うてたんですよ。だけどそれは駄目だと。それに周りの人たちも同調してくれる。だから多少抵抗あったって、あんたはそれで突っ走れみたいなこと、応援してくれた人も多かったのですね。初山さんとか井出さんもそうだったし、県の中でもそうでしたね。競技団体の人たちも。亡くなっちゃったんだけど、スキー連盟の塩島さんって人がいてね。全国スキー連盟の副会長やったりした人で、荻原健司さんたちとかも頼ってた人なんだけど、俺も親しくさせてもらって。その人にも「それはそうだよって。伊原ちゃん、それは突っ走らないと。そんなのおかしい。ぐらぐらしちゃうとおかしくなっちゃうから。だから俺たちも応援するんだから。それはもう、あんたたち頑張りなよ」って言うてくれたりしたからね。

今でもすごく印象に残ってることがあって、全国の障がい者スポーツ大会だったかな。どうしようもない若い子がいたんですよ。おふくろさんと2人で暮らしてて、本人は仕事したりしなかったりだけど、おふくろさんがすごい苦労して働いてる家庭でね。息子はそれでスポーツタイプのいい車に乗っていたり、おふくろさんのことも召し使いたいな使い方をしてたんだよね。競技やらせると結構できるんだけど、おふくろさんにはあれやれとか、これやれって言ったから、俺、怒ったんですよ。周りの人はみんな黙っちゃったけど。「おまえ、何をやってんだ。スポーツやりに来て、おふくろを召し使いたいな使い方するなんて、そんなやつ帰れ」って。「そんなやつがスポーツ大会なんか行って、たとえ金メダルになったとしても、そんなの周りから見たって、誰も尊敬しないぞ」って。それでおふくろさんには付いていなくていい、大会に行かなくていいって。全部指導員にやらせるからいいって言うてね。それから半年くらい経ったときに、おふくろさん

が来てくれたんですよ。あのときに怒ってくれて、うちの息子はすごく変わったって、すごく自分のことをやるようになったって。今でも覚えるけど、おふくろさんが握手したら涙だかよだれをべたべた垂れるほど感動してくれて。それが俺には一番の原点かな。もう福祉じゃないんだっていうね。もうパラはそういうレベルを超えて、さらにその中から日本代表するのが出てこない、それこそ福祉からいつまでたっても抜けられないから。それは変えないってというのは、自分の思いだったね。それが原点だったかもしれないですね、自分のね。

富田 そうなるとスポーツか福祉かを巡る応酬が準備の中では、一番、きつかったことだったのでしょうか。

伊原 きつかったって、そんな言い方を俺がしちゃいかんと思うけど。まあけど、やってく中では自分である程度決めざるを得なくて。どうする、どうするって言うても決まらないので、一緒にやってた仲間は抵抗あったかもしらんけど、もう、こうするって決めてけばよかったし、初山さんとか、そういう主だった人たちと話をすれば、みんなOKって言うてくれたからね。そういうのは良かったんで、それがキツイとかはそこまで思わなかったけど。

ただこれ、役人の変なところで、同じ県の中で組織委員会の外にいる人たち。県の幹部とか議員さんとか、そういう人たちが口出してくるんだよね。ある程度決まってる中を県議さんなら自分絡みのなんかあるじゃないですか。いろいろ言うともた問題あるけどね。そういう圧力がすげえやだったね。だから今考えてみれば、仕事をやってく上でやだとか、大変だったとか、ストレスをうんとためたって言うかね。どうするかっていうのはあったけど、それよりもあまり、本来では組織委員会の中から外れてる人たち。役人が中心の組織だから。そういう人たちの何ていうのかな。

関わってくるとか、自分の何かを見せようとしてる。そういうのが嫌だったね。言い合いすると、この野郎みたいなこと、言われたりしたからね。これはしょうがないんだろうけどね。

5. 強制退場?? : 大会の最中に・・・

富田 大会が始まってからはいかがでしたでしょうか。あっという間だったり、ばたばたしていたというようなことは

伊原 大会が始まったら、俺たちはちょっと楽になるかと思ったんですよ。始まっちゃえば「各競技の責任者のところで頼むな」みたいな感じだったんですよ。なんかトラブルあって、それでどうしようもないのだけ連絡をくれみたいな話で。あとは担当のところの裁量で良くも悪くもいこうっていう話にしとったんだけど。

想定外のところで記憶にあるのは、ある国の選手団が来ててそこのお医者さん、どうやらお医者さんってのがその国の中でも格が高いらしくて。その人がやり放題で選手村でまったくいうこと聞かない。ボランティアのいうこともなんにも聞かない。その国の団長はまだ若い人で、団長でも、そのお医者さんよりレベルがちょっと低い人だったみたいでその人もなにもいえなかったみたいで。毎回謝りに来てたみたいでね。けど始めて5日目かそこらくらいだったと思うんだけど、もうどうしようもないって話になったのよ。そんなの帰れて言やいいじゃないかって俺は言ったんだけど、そんなこと言えないっていうから。レセプションやってるときかな。夜に抜け出してってその医者にもう帰れて言ったんですよ。選手村で暮らしてもらいたいけど、決めたルールを守ってもらえなければ、もう帰れて。なんで帰らなくちゃいかんみたいなこと言いだしてね。あんたが帰らないだったら大使館のほうへ連絡して帰ってもらって言ったんですよ。他の人たちに迷惑掛けるから、帰ってもらって俺が言って

るって言えって。そしたら通訳さんが、そんなこと通訳できないって泣きだしちゃってね。チェコか。チェコの人だったね。それが来てたね。医者が来てたんだな。団長は女性の若い人だった。最後に、帰るときに成田空港の出発ロビーのところで、みんなにあいさつしてたんだけどあのときはありがとうございましたって。迷惑掛けたって言われたけど。あれは本当に、えらい居直っちゃってね。俺、本当、大使館に連絡するから帰ってくれって言ってね。通訳は泣きだしちゃうし、通訳はまともな通訳になかなかならんし。

富田 今仰っていましたが、最後成田まで選手のかたがた皆さんを送り迎えされたんですか。

伊原 一応ね。送りには、俺、出たんですけどね。俺なんか、本当は各選手団とは関わらないわけだったけど、トラブったところでいろいろね。団長とかそういう人と話したから、そういう人たちは覚えててくれて。何しろ、人数少なかったのと、前大会にも視察行ったから、そういうときにも役員で来る人たちは、大体一緒じゃないですか。

あと大会期間中だと、お国柄にもよるんだけどボランティアのウエアの余ってるのなかだとか、結構そういうのくれている人多いんだよね。これは国に帰ったときのお土産にしたいから、1着でいいからくれとかね。そういうのあって、そんなの駄目って言ったんだけど。ロシアなんてのひどかったよ、いろいろ。俺が付けてる、この、何？ピンのロゴ？ それくれとかね。言ってくるのが結構、格の上の人なんだよね。これ駄目って言ったりしたけど。

富田 他に印象に残ったことはありますか？

伊原 あれだよ。国によってうんと温度差はあるよね。障がい者スポーツなんて特にそうじゃないですかね。社会主義国はそういっちゃ悪いけど上から視線だよ。障がい者の選手に対し

てはね、今はどうか分かんないけど、来る役員は、国のなんとかってポストの人が来るから、その人が絶対的な権限を持ってるんだよね。それで絶対上から目線的だから、そういう人はいろいろなことが命令調だよ。そういうのはお国柄で障がい者スポーツっていっても捉え方はみんな違うんだなっていうのは感じたよね。理屈じゃなくて、何となく感じるじゃないですか。ものの言い方とか、選手たちの反応の仕方とかって、見てるとね。だから、そういうのはあったなあ。

6. 選手村の風景

伊原 あとなにしろ始まるまで準備は、それなりのものできてるけどパラに人数がどれくらい集まるかね。観客もそうだし、選手だって、本当にね、真剣に来るのか、旅行気分で来るのか。俺たちが行ったノルウェーの大会なんかも、観光気分で来るような選手もいるんだよね。競技なんかどっちでもいいみたいな。アトランタなんかは夏の大会だったけど、あそこ、行ってたら、選手村のどこなんてディスコみたいなのがあって、朝方までそこで騒いでるんだよね。そんなもん、選手で来ていて、他の選手にだって迷惑掛かるし、そんなこと、日本だったらあり得ない。それが夜中まで酒に酔っぱらってべろべろで、それで一晩中、踊って騒いで。あんなの本当に観光気分で来てんじゃないかっていうのがあったから。

長野もそんなの来たらやだなっていうのあったけど、それはあんまりなかったみたいですけどね。一応、食堂も閉めちゃうし。閉めろって言って、閉めたんですよ、俺たちはね。もうちょっと開けといてくれってというような要望あったけど、食事は、夜9時までとかね。それまでに全部、食事、済ませろとかありましたけど。だから、お国柄によってうんと違う。選手村の料理はオリンピックの料理をやった人たちが、品数は少ないにしても同じものをそのままやってくれたから。選手や役員の中には料理をこんないろんな種類、出してく

れたの初めてだって感動してたりしてね。オリンピックに比べたら少ないっていわれたかも知らんけど、コックさんがオリンピックだけしっかりやってバラのときに手抜いたっていわれるのもやだから、これだけは協力するよとかね。品数はこれだけ出すよとか、そういうふうにやってくれたからね。けどやってくれるってことは経費もかかるわけですよ。材料費一つにしても、人件費はただとしても、食材の費用だとか、そういうものも種類、多くなるからね。だから、そういうものも、本当に読めないじゃないですか。最後になって、精算してみて、赤字になるか黒字になるかみたいな世界だったからね。ノルウェーの選手村だって見たけど、オリンピックとパラだと、待遇は全然違ってたしね。長野は全部同じ部屋を使って、食事も似たようなもの出すことはできたけど。

選手村の中の、予想外にヒットしたのが、小諸の懐古園の、何ていうの？電動でお客さんをいっぱい乗せれる、子どもたちをいっぱい乗っける電車あるじゃないですか。あれを選手村の中、走らせたんですよ。たまたま、俺が昔一緒だった人が小諸の助役やったりしてて、ある時に選手村の中での選手の移動はどうするんだみたい話が出てね。じゃあそれをシャトルみたいにして選手村の中を回そうかと、そうしたらいいかなって。それで助役のそこへ飛んでって、冬の間だし、使わないなら貸してくんない？って。そうしたら、そんなのでいいんかい？俺たち、批判されることねえだろうなあ？って言うくらいだったんだけど。後で褒められた。好評だったとかって聞いたりもしたんだけどね。だから、意外なところでヒット作みたいなのがね。報告書の中も出てるけど、雪の中を走る、これは坂城町のやつなんだけど。雪の上の車？とかもね。坂城町は工業の盛んなところで。たまたま、俺が飯田へ戻る前に隣の室長やってた人が、町長やってて、その人がなんか協力するけど、なんかないかかって逆に言ってくれて。だから、本当、何となく、個人の思い付きで、なんとかならない？とかね。思い付きみたいな話が、

それがとんとん拍子に進んでとか、そういうことがいっぱいあったよね。

7. 長野パラから飯田へ

富田 大会が終わった後の1年は、どういう仕事をされていたのでしょうか。

伊原 報告書を書いたり、1年後イベントっていうのを、最後にやって締めくくろうと思って。ちょうど、1年たったときの3月6日かな、その辺りの土日に、1年後イベントやるっていうことで、それまでには報告書もつくり上げて、あと、コンサートみたいなものをやるっていうのでやってたね。コンサートには武田鉄矢だとか、中森明菜だとか、そういう人がボランティア出演してくれて、最後の余剰金の処分も含めて、パラに協力してくれた信越放送(SBC)で全部残務整理しました。映像関係だけでなく報告書もSBCのところの出版部で請け負ってもらっていたので、全部ひくくめてやってもらって、総額で幾らで形を出してもらって、それでその1年後イベントをやって終わりっていう感じで。

でも、そのときには、5人くらいしか残ってなかったかな。本当の残務整理の3月まで残ったのはね。県の職員が3人くらいかな。それと、あと市の職員と。民間から来た人たちは、早い人は大会が終わって、春先のうちくらいで、みんな、戻ったし。4月1日の異動で県の職員の大部分は各市町村にみんな戻したし、民間会社の人もかなり戻ったから。各責任者くらいが少しずつ残ってって。それで、10月くらいで大部分が減って、最後に5、6人、残って、この報告書つくったり。金の精算だったりとか、あと、IPCに余剰金が出たら、その余剰金はIPCに半分をやるっていう契約になってたんですよね。契約っていうか、ハンドブックっていうオリンピック憲章のコピーしたようなものがあって。それで、やるっていう話になってたんで。

実は俺は余剰金が出たら障がい者スポーツの長野県の基金をつくりたいっていうのがあったんですよ。それだけど、最後に余剰金が出そうだとしたときに、組織委員会には関係ない、さっきもちょっと言ったけど、当時の副知事やなんか、そんなのみんな各自治体が負担金出してるんだからその金は、みんな各市町村に全部還元しろっていわれて。それはおかしくないですかって、俺、言ったんだよね。みんなの前で俺怒られたんだけど。でも、俺はそんなことしたら何も長野に残らない。障がい者スポーツって何も残らないじゃないって話をしたんだよね。そうしたら、いやみんな金のない中で金を出したんだからって。でも俺たちも予算要求だってある程度我慢してやってきて、自分たちでマーケティングなんかして、企業訪問したりで資金集めもして、それでの余剰金だったから、全部県のお金ってわけでもなかったから。せっかくやった以上は、ただこれで終わりました、大会終わりましただけじゃなくて、長野に基金を残して障がい者スポーツの元手になって長野ならではの何かスポーツ大会の資金にするとか、これから何かの助成をするとか、そういうものの基金をつくりたいんだって言ったけど、受け入れられなくてね。それが俺がこっちに帰ってくる決定的な出来事でしたね。その人は次の知事に出るつもりでいたからね。言い合いになっちゃって。周りの人が、ちょっと待って待ってって感じで止めくれたけど。けどその時に、これ言ったって駄目だなんて思って。一緒にはやれないなって。このままこっちにいてもしょうがないから終わったら飯田に戻ろうと。そういうこともあったんですよ。

俺としてはこうなったらもうしょうがない。報告書とか1年後イベントとかそういうことはきちっとやりたいと。そんな当初の計画になかったんだけどね。それも予算要求するわけじゃないから。今ある余剰金の計画書に含めてね。1年後イベントだとか、精算だとか、IPCの報告みたいなものがあって。そういうのも含めて、全部、

残務整理期間中のやつの予算化しといて、県とかから出してもらう金はもうないから。自分たちで持ってる余剰金で出して、残りはしょうがないから県とか自治体に返したけど、あとIPCのところへは、ゼロってわけにはいかないだろうってね。けど返さなくてもいいじゃないかみたいだね。もともと、税金でやってんだからって言われたんだけど。でも、それをやらなかったら、それこそ、長野でパラやったのに今度、IPCから批判されたら、そんなのが新聞記事でも出したら、それこそ、せっかく、大会成功したなんていってたところに水を差しちゃうから。大した額じゃなかったと思うけど。一応、それで残った分の中からIPCに渡して、このイベントと報告書とかの分の金は残してあとは全部返して。それで終わったんですけどね。役所仕事だからそういうもんなんだろうなと思うけどね。やっぱり、金のことは、そりゃ確かに税金だから大事に使わなくちゃいけないのは分かるけど。役所がやるイベントだから、余剰金は返さなくちゃいかんけど、でも何も残らないじゃね。大会終わりました。報告書を書きました。これだけじゃね。それこそなんにもないじゃないかって。だから、それが俺の一番の不満でしたね。だから、飯田に帰る。終わって精算したら帰っていったら、当時の人たちになんでこれだけ苦労して今帰るんだってね。終わったらそれなりのポストもあるんだからって、たまたま当時の人事課長とか、総務部長たちが親しい人だから、言われたんだけどね。俺もおふくろの介護もしなくちゃいかんし、もう帰るって言って。それで、こっち、帰ってきちゃったんですけどね。

同じ県の中でパラリンピックやったっていっても、温度差はいっぱいあるよね。役人の中でも、俺、言われたよ。終わって飯田へ帰ってきたら、同僚とかに表に出ないけど不祥事でもあったのかよって。組織委員会で一緒に働いてたみんなは県庁の中へ残ってそれなりのポストに入ってたじゃないですか。なのに俺はこっち帰ってきちゃったから。だから聞きづらいこと聞くけど、伊原ちゃん

なんかあるのかいって。期間中になんか不祥事でもあって、だから飯田に戻ったのかいって言われたけど、そうじゃねえって。そうっていただいても結構だけど。いや、いろいろ気に入らないことがあったし、帰るって言って帰ってきたんですけどね。

おわりに

伊原さんのご自宅のリビングには長野パラリンピックの関係する物品が飾られており、またインタビューに際しては、これまでに受けた取材の切り抜きや報告書を準備し、時折それらに記載されていることを指さしながら丁寧に、力強く、パラリンピック経験を語っていただけた。長野パラリンピックの始まりから終わりまで組織委員会の中核で実務をこなし続けた伊原さんの言葉にはその時の情景が浮かび上がるリアリティがあった。「長野パラのことは伊原さんに聞けばいいよ」。他の関係者にインタビューをすべく連絡を取ったときこう教えてくれた人がいた。またある人は伊原さんのことをこう呼んでいた「ミスター長野パラリンピック」と。

インタビューも3時間が過ぎたころ、一時席を外した伊原さんが持ってきたのは、長野パラリンピックに関わる記念品やグッズ、書簡の数々であった。突如目の前に現れた「宝の山」に息をのむ私たちに対し伊原さんは「必要な持ってってください」とさらに信じられない言葉をかけてくれた。長野パラリンピックから20年が経ち、ご本人も定年退職を迎えて隠棲生活を過ごす中、そろそろ処分しようかと考えていたという。突然のことに戸惑いながらも私たちはそのご厚意に甘えることにした。

後日、伊原さんは「息子夫婦と孫に会いに行くついでだから」と自ら車を運転して日本体育大学世田谷キャンパスに段ボール7箱ほどの長野パラリンピック関連資料を持ってきてくれた。その段ボールの中には、あのご自宅のリビングに飾られ

ていたものまであった。これらの寄贈品はオリンピックスポーツ文化研究所において「伊原コレクション」として今後整理を進めていく。

突然の連絡にも関わらず、快くインタビューを

引き受けてくださり、さらには資料の寄贈と運搬をしていただいた伊原義文さんに心から感謝申し上げます。



伊原家のリビングにて



伊原夫妻



長野パラリンピック組織委員会設立時の集合写真

(受理日：2020年2月18日)